

高校3年生

「生き方」を探る —未来への一歩—

湯澤秀文・川田基生
丹下容子・鈴木一悠
杉本雅子・飯島幸久
丸山 豊

【抄録】 高校3年生の時点での、それぞれが考える自分の「生き方」をまとめることを目的とした。その方法として、1学期に、自分の進路について調べ、フィールドワークをし、話しを聞いた。2学期には、調査結果をもとに原稿を書き、スピーチを行った。友人の意見を聞きあうことで自分の考えをまとめ、卒業論文を仕上げた。

【キーワード】 生き方 進路 学外講師 フィールドワーク スピーチ 卒業論文

I 学年テーマについて

高校3年生のテーマは「生き方を探る」である。高校3年生の時期に、卒業後の行き先を決めるというだけでなく、これから自分がどんな生き方をしたいのか、生き方を含めた進路選択をしてもらいたい。そのために、友人、先輩や、社会で働く人々の様々な意見や価値観に触れ、自分の人生や、仕事についての考えを深めてほしいと考えた。サブテーマは、高校を卒業し、それぞれが自分で選んだ道に一歩を踏み出せるように、との願いをこめて、「未来への一歩」とした。

高校3年生が、自分の意志で進路を決定することが、これまでの総合人間科の学習のしめくりとなる。現在の自分を取りまく社会や、その中で生きる自分の姿を18歳の視点でとらえ、前向きに今後の生き方(進路)を考えることを目標とした。

II 1年間の活動内容

- 4月17日 オリエンテーション(全体・保護者参観)
 - ・学年テーマとその目的、進め方
 - ・一昨年度の公開授業のパネルディスカッションのビデオ紹介(20分)
 - ・進路系統別グループ編成のためのアンケート
- 5月15日 系統別進路研究会(系統別グループ)
 - ・自己紹介
 - ・学外講師の希望調査
- 5月29日 進路研究のフィールドワークの準備(系統別グループ)
- 6月5日 学外講師を招いての講演、ディスカッション

(希望によるグループ)

- 6月10日 進路についてのフィールドワーク(各自)
- 6月19日 フィールドワークの報告会(系統別グループ)
- 7月17日 1学期の感想、評価(系統別グループ)
- 9月4日 2学期の予定説明(系統別グループ)
スピーチの準備、スピーチ用ワークシートの記入
- 9月18日 スピーチの準備 1(系統別グループ)
- 10月2日 スピーチの準備 2(系統別グループ)
- 10月16日 スピーチ「生き方を探る」1(系統別グループ)代表者3名を選出
- 10月30日 スピーチ「生き方を探る」2(全体)代表者のスピーチを聴く
- 11月6日 卒業論文の準備(系統別グループ)
- 11月20日 卒業論文の準備(系統別グループ)
- 12月18日 卒業論文の完成(系統別グループ)

III 生徒の取り組みの様子

今年度は、1学期に「学外講師を招いての講演、ディスカッション」、「進路についてのフィールドワーク」を、2学期に「スピーチ」と「卒業論文」を行った。

(1) 学外講師を招いての講演、ディスカッション

昨年の担当者から、「茶話会ができるくらいの人数と雰囲気の中で話を聞く機会がもてるとよかった」と聞き、1グループの生徒が10人程度になるように、12名程度の講師をお招きすることにした。講師は、スクールボランティア(名古屋大学教授や保護者、卒業

生)や、先生方の知り合いの方をお願いすることにした。高3担当者が手分けして連絡を取り、13名の方をお呼びすることができた。(敬称略)

- 1 金井篤子 (名古屋大学教育学部)
「働くってどんなこと?
生き方とキャリアについて」
- 2 末松良一 (名古屋大学工学部)
「からくり人形とロボットの未来像」
- 3 藤井陽一 (名古屋大学医学部)
「AIDS ウィルス最新情報」
- 4 渡邊順子 (名古屋大学医学部)
「これからの看護」
- 5 高倍鉄子 (名古屋大学農学部)
「砂漠緑化のきめて 耐塩性植物をつくる」
- 6 木村純子 (ラジオパーソナリティ、リポーター)
「マスコミで仕事をしたいと考えている人へ」
- 7 藤川尚子 (サッカーチーム所属)
「サッカーにかけた青春」
- 8 中野智司 (会社員)
「自分の職業選択は成功だったか」
- 9 小島 聖 (会社員)
「自分を知らう!見つけよう!
ひとりひとりのルートマップ」
- 10 山口 勇 (会社員)
「旅行代理店、添乗員に興味のある人へ」
- 11 伊藤実里 (大学講師、AFS 職員)
「アメリカ留学の経験と現在の留学事情」
- 12 渡辺邦子 (介護福祉士)
「介護・社会福祉を学びたい人のために
障害者・老人のために働くということ」
- 13 岩崎和彦 (ピアノ技術者)
「音楽と生活」

生徒には、所属する進路系統別グループとは関わりなく、自分が話を聞いてみたいと思った人の話を聞けるように、希望をとってグループ分けをした。実際には多いところは20名、少ないところは3名となったが、生徒の希望を優先した。その方が真剣に話を聞け、積極的に取り組めると考えたからだ。(それで成功だった)

講師の方には、自分の仕事や生き方について話していただいた。事前に生徒には、受け身の姿勢ではなく、しっかり話を聴き、積極的に意見や質問をし、講師の方にも、自分たちにも有意義な時間になるように心がけるよう呼びかけた。

当日は熱心に話を聞くことができた。生徒は講師の方の、具体的な仕事の話に、驚いたり、やる気になっ

たりしていた。それ以上に、仕事を通して語られる講師の方の人生観や職業観に、心を打たれていたようだった。(以下○は生徒の感想である)

- 「今回のお話を聞いて、進路について深く考えることができたので、人との出会いも大切なものだと思った」
- 「夢と現実のギャップは大きいかもしれないけど、私はがんばってみたいと思う」
- 「講師の先生みたいに頑張って研究したいと思うものを見つけない」
- 「小島さんのように自分のやりたいことはとことんやって道を開きたい」
- 「自分の能力をどのくらいつけるかが、生活を豊かにするカギだという話を伺って、自分が能力を付けるとしたら何なのかと考えると、やはり語学だと思った。だから、大学に入ってしっかり語学をやって社会に出て発揮できるように頑張ろうと決意を新たにした。大学で何かやりたい職業とかが見つかるかもしれないので、大学選びもしっかりしなければならない」
- 「学外講師でお話をうかがった藤川尚子さんの言葉に『今やりたいと思うことが大切である』という言葉があって、それを聞いて、先のことを考えるより、今自分がやりたいことがあるのならそれをやるべきであると思った。そして夢や希望を持ってやりたいことができるということは幸せなことで、それがいい生き方ではないかと考えるようになった。私もこれから今できることを一生懸命やり、たとえそれが将来につながらなかつたり、失敗したとしても、その失敗で学んだことを次に生かして、どんどん新しいことに挑戦していきたいと思う」
- 「金井先生のお話を聞いて、私は進路を考える上で、自分の可能性を広げることのできる場所を見つけることが大切だと気づきました。そして、見栄を張らずに進路のことを考えていくべきだと思いました。たとえどんな道を選んでも、多かれ少なかれ障害はあると思います。だから私はどんな道に行っても、そこで自分を表現できる図太い人間になって生きて行きたいと思います」

(2) 進路についてのフィールドワーク

自分の進路に直接関係する場所を自分で探し、電話でアポイントをとり、訪問した。フィールドワーク後に礼状を書き、報告会を持つことで情報交換した。

- 「私は城山病院へ行き、実際に働いている管理栄養士さんに話をうかがった。将来のことをよく考える

- ことができる良い機会となった」
- 「3年間総合人間科をやってきて、けっこう得したな、と思ったのは、行動力が身についたこと。フィールドワークでは、1年、3年とも1人で行ったし、同じテーマの人もいなかったのでも1人で調べ、考えてきた。3年生になるとすっかり総合人間科に慣れて、色々なところに1人で出かけて情報集めをするようになった。これは3年間総合人間科に取り組んだ成果だと思う」
 - 「学外講師の末松さんの話やフィールドワークの稲垣さんの話を聞いたり、自分でいろいろ調べたりした結果、私は、工学部に行きたいと思いました」

フィールドワークを自分の進路を深く考える糸口とした生徒は多かったが、自分の進路に直接関係するフィールドワーク先を見つけることができず、考えを深めることのできなかつた生徒もいた。

- 「フィールドワークも行くところがなかったので、友人について行ったのみ。すごく時間のむだだった気がする」

(3) スピーチ「生き方を探る」

「生き方を探る」というテーマで、スピーチの内容は、自分の進路や過去にこだわらず、現在興味を持っていることなどでもよいとした。「生き方」を見据えた進路について自分も語り、他人の意見を聞くことで「学び合い」をスピーチの目的とした。また系統別グループから投票で代表者3名を選び、学年全体でスピーチを聞いた。昨年の反省として、代表者のスピーチの評価はやめたほうがよいとあったので、スピーチを聞き、記録用紙には要旨と一言感想を記すのみにした。代表者のスピーチは投票により選ばれただけあって、聞き応えがあり、生徒たちも友人の意見を真剣に聞いていた。自分の心の内を披瀝できること、またそれを受け入れる雰囲気があることが、総合人間科のよさである。

- 1 川本 裕樹 「選択肢」
- 2 市村 怜子 「小さな世界」
- 3 伊藤 絵美 「今の私が考えていること」
- 4 黒江 真理 「ボーダーレス」
- 5 谷口 翼 「神サマ。」
- 6 布施さやか 「進路」
- 7 山田ふをれ 「いろいろ考える今日この頃」
- 8 鵜飼 太輔 「私のやりたいこと」
- 9 川島英里子 「夢に向かって take off」
- 10 谷口紫香子 「やっぱり…」

- 11 宮島 早代 「思いやりについて」
- 12 森山 誠 「自立」
- 13 稲垣いつか 「私のこだわり」
- 14 角田 誠治 「無題」
- 15 遠山 裕樹 「雑学的見地より」
- 16 野田 有加 「自分の意志の大切さ」
- 17 福山 友子 「介護について」
- 18 深谷 夏海 「自己分析」
- 19 山内 麻奈 「名古屋」

スピーチを高1からの総合人間科での様々な取り組みのまとめとしてとらえている生徒がいた。総合人間科のカリキュラムを意識していることが分かる。

- 「総合人間科の様々な行事が終わると、次は自分が今までにやってきた事の発表（スピーチ）という事で、今までやってきて考えた事をまとめる事となった。「まあちょうどいい機会だ」と思って、自分のやってきた事、考えた事、結論などをまとめた。この時ぐらいに総合人間科の時間割（行事、やる事のの流れの事）がよくできているなあと感じたことはない」

(4) 卒業論文

高3の1年間、総合人間科の授業で、進路について考えてきたまとめとして、原稿用紙10枚程度の論文を課した。内容については、自分史にこだわらず、現在の思いを自由に語ってもらった。

論文の量にうんざりしたような顔をしていた生徒だったが、この時期だからこそ書きあげることができたのかもしれない。内容について、配慮が必要と思われるものもあったが、他人を誹謗中傷するものでなければ、可とした。

- 「このレポートをきっかけに、自分の過去を思い返してみてもう1度やり直したいな、と少しだけ思いました。完璧な人間なんていません。だから、やり直したいと思う気持ちは誰にでも少なからずあると思います。でも私は、これからの人生には絶対後悔したくありません。後に思い返したとき、『あの時こうしてよかった、あの時の自分はまちがってなかった』と思えるような人生にしたいです」
- 「私はこの論文を書きながら、総合人間科をやっていなかったら、どんな進路にしていたらと思う。きっと今とは違うものにしたと思う。それは本当にやりたいことだろうか？少し怖い」

書くことにより、今までやってきたこと、現在の気

持ち、これからやりたいことを確かめることができた生徒がいる一方で、目前に迫った進路（受験）しか目に入らず、卒業論文の意図を十分汲むことのできない者もいた。

- 「今現在12月18日！はっきりいってこんな卒論なんか書いてる場合じゃない！入試まであと1カ月ちょい！来年の今頃はちゃんと大学生やっているだろうか？そうじゃない可能性も大いにあるのがちょっと怖い。まあそうならないように、これから1カ月ちょい、がんばろうと思う」

IV 1年間の活動を振り返って

「生き方」という大きなテーマで、1年間、進路について考えてきた。多くの生徒が高3の総合人間科の取り組みを基に自分のしたいことをはっきりさせ、自分の進路を選んだ。卒業論文を読むと、生徒は高校3年の総合人間科を、3年間の集大成としてとらえており、自分の中に3年間のテーマの連続性を見ている。生徒の卒業論文から、感想を抜粋する。

- 「総合人間科で心に残っているのは、訪問先へ電話でアポを取ることです。1年の時も2年の時も、電話かけで苦勞しました。はじめはどうやって自分の事を説明すればいいのかわからず、電話の前で固まっていました。2年生の時は訪問先がなかなか決まらず、6時過ぎまで残っていたこともありました。けれど電話かけも発表することと同じように、何度もやっていると慣れてしまいます。それに訪問先が決まって、相手の方にとっても親切にいただいた時は、何ともいえないうれしさと達成感がありました。

総合人間科の授業で学んだのは、自分の考えを持つのはなかなか難しいということ。そしてその考えを人に伝えて理解してもらうのは、もっと難しいということでした」

- 「総合人間科は私にやりたいことを見つけ出させてくれた。将来の夢や目標を持つ人が少なくなってきた今の私たちには、この教科は、自分は何に関心があるのか、やりたいのかなどを考えるのに良い時間を与えてくれたと感じている」
- 「私にとって、高校2年生、高校3年生の総合人間科はとても大切な時間だった。はじめはどんな目的で総合人間科があるのか分からなかったが、今ではうっすらとこの授業の目的が分かった気がする。私は総合人間科をはじめるとあって1番大切なことはテーマ決めだと思う。それはなぜかというと、自分が追求できるようなすばらしいテーマを選べば、

自分のためにもなるし、ぜったい今後役に立っていくと思ったからだ。私は総合人間科で「アメリカン」というすばらしいテーマに出会った。このテーマとの出会いが、私の今後にきっと大きな影響を与えてくれるにちがいない」

- 「何回も総合人間科をめぐらさう、うっとうしいと思った事があります。だけど、多くの人が、この総合人間科から、これからの自分をつくるものの中の大きな要素を得たと思います。少なくとも私はそうであったと感じています」

高3の総合人間科の予定を組むにあたり心がけたことは、総合人間科が進路選択に役立つように、しかし、課題が負担にならないように、ということだった。調べもの、執筆、発表などの活動が総合人間科の授業時間内でできるようにした。余裕をもった計画だったので、おおむね生徒も時間内に集中して取り組み、仕上げることができた。

高3の総合人間科の取り組みを通して、生徒たちの進路や生き方に対する考えが次第に深まっていき、それぞれが、現在の自分を肯定し、現在の時点での最善の進路選択ができたことと思う。

(文責 杉本)